

タイトル	オリジナルeラーニング教材を利用したドイツ語授業
著者	北原, 博; 北原, 寛子; KITAHARA, Hiroshi; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(154): 233-236
発行日	2012-12-25

オリジナル e ラーニング教材を 利用したドイツ語授業

北 原 博 子
北 原 寛 子

はじめに

2010年の第2学期にCALL教室1室が本学に整備されて2年が経過した。本学ではCALL教室と同時に語学のLMS (Learning Management System) としてWebTubeが導入され、それぞれの授業で工夫を凝らして使用されてきた。また、ドイツ語も含めて市販のeラーニング教材も購入され、授業での活用が図られたり、学生の自習に供されたりしてきた。そうした中、筆者たちはLMSの活用とは別の形で、具体的には株式会社ニュートンが提供するeラーニング・システムを用いて、一昨年度より教材の開発に着手し、昨年度には試作教材の作成と平行して実際のクラスでのeラーニング運用を試みた。さらに昨年11月にはプロジェクトチームを拡充し、本年度は昨年度の運用実績に基づき、教材の改訂、教科書の整備¹を行ったうえで、4人の教員がeラーニングを授業に使用している。この教材は従来型の文法教科書であり、授業にコンピュータを必要としない。CALL教室での授業にも用いているが、本教材のコンセプトは、普通教室の授業をも充実させるeラーニングにあり、対面授業とeラーニングとを効果的に結び合わせるブレンディッド・ラーニング (Blended Learning) を志向している。

本稿ではまずeラーニング教材の開発に至った経緯とプラットフォームとして株式会社ニュートンのeラーニング・システム (TLT) を採用した理由を述べた上で、教材の概要を紹介する。続いて、昨年度1年間の実際の運用から得られた授業運営上の問題点を考察するとともに、学習時間や学習成果、学習者アンケートに基づく学習者側の意識についても分析を行う。本稿をまとめることで、昨年度の経験を共有しやすくするとともに、データの分析によって開発教材の成果や問題点を明確化することで、今後の教材発展に役立てたいと思っている。

1. eラーニング教材開発の経緯と概要

1.1. 開発の経緯

まずは教材開発の経緯について触れておきたい。本稿筆者の一人北原博は1999年から当時非常勤講師として勤務していた大学でCALLのパイロット・クラスを担当することになり、以来、初

級ドイツ語の授業にコンピュータを取り入れてきた。当初はLL教室に教室内のコンピュータをネットワーク化しただけのもので、ハードはあっても授業で使えるような学習コンテンツがない状況で、教材の自作を試行錯誤することとなった。とはいえ、学習コンテンツを一から準備するだけの力量もなく、開発予算がつけられていたわけでもなかったため、市販の教科書を用いて補助教材を作っていた。

最初に手がけたのは文法読本の読解テキストに、音声をハイパーリンクで一文一文に貼り付けただけの、簡易マルチメディア教材であった。Webブラウザを利用したものではあったが、データはCD-ROMに焼いて授業の中だけで使用していた。その後、Hot Potatoes²という教材作成ソフトの存在を知り、主に文法ドリルを作成した。Hot PotatoesはJavaScriptを利用したWebベースの教材ではあるが、これも教科書の定着用の問題を中心に作成したため、閉じられた環境で利用していた。CALLはもちろんコンピュータを語学学習の学習支援に用いるものであり、その意味では一応CALL教材ではあったが、ネットワークの特性を活かした教材にはなっていなかった。

その後、北海学園大学でドイツ語教育に携わることになるのだが、本学ではちょうどCALL教室の導入計画を進めていたこともあり、教材のプラットフォームがどうなるのかを見極めるために、しばらくコンピュータ教材の作成を見合わせていた。そしてすでに述べたように、一昨年の第2学期からのCALL教室運用にあわせ、北海学園大学のドイツ語教育に最適化された教材の開発が必要となったわけである。

1.2. なぜニュートンのeラーニングを採用したのか

先にCALL教室と同時に語学用のLMSが導入されたことを述べた。筆者の一人北原博も当初はLMSを用いた教科書の補助教材作成を中心に試みている。CALL教室ではLL機能を使いながら教科書の学習を行い、時には授業の中で、時には授業の外でLMSを用いた補助教材を使用した。しかし、実際に使用していく中でLMSに含まれる機能では不十分な点も出てきた。誤解してはならないのは、LMS自体に問題があるというわけではない。そうではなく、教材として求めていたものとはLMSはコンセプトが違うものだったということである。LMS自体は学習者同士の協調学習のためのプラットフォームになりうるもので³、その使用により効果的な授業の可能性を開いてくれるものである。

開発の経緯でも触れたように、最初の簡易マルチメディア教材を除いて、これまで手がけてきたのはドリル教材である。コンピュータは反復学習を支援するには格好の機器である⁴。筆者がHot PotatoesやLMSに期待していたのは授業内容を定着させるための教材であった。やはり学生にとってはわからないというのは面白くない。教師の側からすれば、わからないのはそもそも本来必要な復習を怠り、既習事項が身についていないからだ、ということになるのかもしれないが、学生が定着練習をしないうならば定着練習をシステム化できないかと考えたのである。そういう意味では授業の中心にコンピュータがあるのではなく、あくまでも対面授業定着のためのト

ラーニング手段としてコンピュータを使用するわけである。Webを利用することで教室内コミュニケーションのあり方を変えるという方向を模索したのではなく、従来型の授業の補助手段としてコンピュータを位置づけているのである。

もちろん小テストをまめに行って、学生が定着練習をするように促すという方法もあるだろう。しかし、テストは定着のための動機付けにはなっても、練習それ自体ではない。LMSを使い始めたとき、学生に繰り返し練習することでドイツ語の基礎の定着を図ってもらいたかったのであるが、思惑は外れた。LMSの機能はドリルではなく、テストである。したがって、自分が何を理解できていて何が理解できていないのかを学習者が知る上では有効である。しかし、そこで明らかになった未習熟のものについて、定着を図るための機能はない。せいぜい合格点を設定して何度も何度も同じテストを受けさせるぐらいのことしかできない。とても熱心に勉強する学生は何度も繰り返すが、本来勉強して欲しい、学習時間が絶対的に不足している学生に限って、1回テストを受けて結果を見るだけで、未習熟の箇所を定着させようとは思わずに済むのが実情である。こうした思いはLMSを使用していく中でますます強まっていった。

こうした問題の解決の可能性として浮上してきたのが、ニュートン社のeラーニングであった⁵。同社のeラーニングは次のようなものである。図1のように、各単元の学習を始める際には準備した問題はすべてAに格納されている。まず、1度目の学習ではA問題を順番に学習していくことで、未習熟箇所のあぶり出しを行う。ここで間違えたものは、「トレーニングモード」で指定回数連続して正解するまで繰り返し出題される。これが第1回目の定着練習となる。続いて、1度目の学習で理解できていなかった問題だけを2回目は集中的に学習する。これがB問題である(図2参照)。ここでも定着

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A	10	10	10	9	9	9	9	9	9	12	12	12
B												
C												
学習時間	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00
合格時間	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00

図1 まずはA問題を学習する

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A	10	10	10	9	9	9	9	9	9	12	12	12
B					1		1				1	
C												
学習時間	0:12	0:03	0:05	0:03	0:03	0:07	0:05	0:01	0:06	0:07	0:03	0:05
合格時間	0:04	0:02	0:02	0:02	0:01	0:05	0:02	0:00	0:05	0:03	0:02	0:02

図2 Aで間違えたものはB問題になる

していなかったものは「トレーニングモード」で定着練習を強いられる。さらに2回目でも定着していないものに集中して3回目の学習を行う(C問題)。3回目の学習が終わると、さらに1回目で間違えたものを「ニガテ1」で復習し、2回目で間違えたものを「ニガテ2」で復習する。ここまで繰り返すことでこの単元の学習が修了となる。これはいわば従来ペーパーベースの問題集で学習してきたプロセスをコンピュータで再現したものである。先にLMSとはコンセプトが違うと述べたのはまさにこの点である。テストではなく、しっかり身に付くまで練習してもらいたい。それを実現するシステムを提供しているのが、ニュートン社のeラーニングであった。

1.3. どのように教材を作成したのか

次に実際の教材作成の作業を紹介する。eラーニング教材を作成するには、①教材の構成の検討、②問題に使う短文や文章、音声ファイルといった素材の収集、③eラーニング・システムにあわせた素材の加工といった作業が必要になる。

まず、教材の構成について触れておきたい。現在、北海学園大学で提供しているドイツ語科目は、1年生対象では、第1学期に基礎Iと会話I、第2学期に基礎II、会話II、文化Iの合計5科目である。基礎I・IIは「言葉の仕組み」を学ぶ授業、つまり文法が中心の授業である。開発している教材の対象はこの授業である。したがって、オーソドックスな文法教材を意図した。当初の意図は、授業の3分の2だけ使う教材で、残りの時間は担当者が自由に使うというものであった。そうした時間を北原寛子は主にポップミュージックを素材にした学習に充て、北原博は“Schellingstrasse 60”⁶というインターネット教材を使用し、文法だけの授業で単調にならないように、またオーセンティックな素材に触れられるよう試みた。

次に素材の収集について。本来ならば素材を一から集め、教材を構成するのに最適の素材を用意すべきであるが、この点は素材収集に時間をかけられなかったため妥協せざるを得なかった。そこで、できるだけ音声をつけたいということもあり、ニュートン社が提供してくれた素材、ニュートン社のグループ企業のニュートンプレス社から刊行されている『トレーニングペーパー』⁷というCD付きの問題集をベースとすることになった。この問題集は文法2冊、長文1冊、語彙1冊の計4冊あり、その中の文法2冊を用いることにした。ただし、元の教材は新訂版の発行が1981年の古いもので、その後2003年にCD付きの新装版として刊行されたものであるが、語彙などに明らかに古いものが含まれている⁸。また、2人称は敬称のみで親称の練習がない、新正書法に対応していないという問題もあり、最低限の修正は行っている。

こうして集めた素材はニュートン社のeラーニング・システムに利用できるデータに編集し直すことになる。問題のタイプごとに問題文、正解、解説、時間、選択肢、音声ファイル名などといったデータをエクセルで入力するだけなので、作業自体は決して難しいものではない。出来上がったデータは、ニュートン社で教材に変換され、まずは検証用サイトでチェックをした上で、学習用サイトに公開される。

作成した教材は膨大な数になった。本年度は大幅に削減したが、昨年度実際に作成した教材は、選択 2413、記述 2227、並べ替え 343 の合計 4983 題。ただし、定着を図るため出題形式を変えて同じ文を繰り返し用いているので、実際に学習する例文の数はこれよりもかなり少なくなる。クラスにより進度や学習対象とした問題は異なるが、19 課まで進んだクラスでは、選択 2232、記述 2092、並べ替え 334 の合計 4658 題学習したことになる。

以上が教材の概要である。次にこの教材の学習効果の分析、課題をまとめておきたい。

2. e ラーニングと授業の関連付けについて

開発した e ラーニング教材は本稿の筆者 2 人がそれぞれ自分の担当する基礎 I および基礎 II のクラスで使用した。筆者の一人北原博は CALL 教室ないしはコンピュータ実習室で授業を行い、北原寛子は普通教室で授業を行った。そのため教室のタイプの違いによる学習データを収集できたことに加え、e ラーニングを自習教材として使用する際のノウハウを蓄積することにつながった。

まず、学習者全員に個別のコンピュータがある CALL 教室およびコンピュータ実習室での授業実践について説明したい。このクラスでは、授業開始前から学生は自分でコンピュータを起動させ、インターネットに接続可能な状態で文法の授業を受けることになる。対面で解説の上、学生はそれぞれ紙媒体の問題に取り組む。学習の進捗状況には個人差が生じるため、練習問題が終わってしまった学生には次の課題として e ラーニングに取り組ませた。練習問題が終わった学生は e ラーニングをするようにと時々指示はしていたが、次第に学生もこのスタイルに慣れ、課題が終わった学生からどんどん e ラーニングを進めるようになっていった。クラス全体が課題を終えたことを確認した後、紙媒体の問題の答え合わせを実施する。このサイクルを反復することで授業が進んでいくことになる。この授業では対面授業と e ラーニングの結びつきは直接的であるうえ、学習が進捗している学生にとっては授業中に取り組む課題がなくなって手持ち無沙汰になるという事態を回避し、進行の遅れがちな学生を取り残すことを避けることが可能となる。もちろん、授業中に e ラーニングが進展する学習者がいる一方で、完全に授業外で取り組む学習者が発生することになる。

次に、普通教室での授業の進め方を紹介する。授業では普通に文法中心の学習を進め、e ラーニングは範囲と期限を授業中に告知し、宿題として授業外に行われる。指導する側はその状況を授業時間外にチェックした。今回作成した教材が学習内容定着のためのドリルであるため、こうした e ラーニングの取り入れ方が可能となった。しかし授業中にインターネットに接続する可能性がないため、授業と e ラーニングの関連が希薄になってしまうという問題を挙げることができる。

さらにはハード面での問題も発生した。コンピュータを所有せず、大学で空き時間に自習室の利用を試みつつも、本学では自習室が不足しているため、長時間集中して取り組むのが困難な環

境に置かれた学習者がいたのである。授業開始時に、コンピュータが必要であることは明示していたが、友人と一緒に履修することを優先させる、あるいは説明を受けたときに事情を理解していなかったのではないと思われるケースが散見された。学期中に自宅コンピュータが破損したとの申し出もあった。このようなケースでは解決策を見出せず、普通の文法授業として取り組むように指示せざるを得なかった。

いずれのタイプの授業でも、宿題として継続的にeラーニングに取り組むことは学習者にとって大きな負担であると感じられたようである。それは自宅学習の習慣がきちんと身につけていないという学習態度の問題や、あるいは低い意欲が原因に挙げられる。特に授業時間外にeラーニングを位置づける場合には、その学習を授業における学びの意欲へといかに結びつけるかは重要な課題だと言えよう。そのためにも、対面授業とeラーニング組み合わせでは、eラーニングによってドイツ語が身についたという満足感のみならず、家庭での多大な労力を要する学習が評価されることに対する満足感も適切に形成する必要がある。そのためには、教員が学習者の進捗状況をチェックし、口頭なりeラーニングのメール機能を利用するなりしてコメントすることは、とても大事な作業になってくる。これは指導する側にとっても確実に負担であることは否めない。しかし、年間の最終的なeラーニング学習時間(普通教室でのクラス平均21時間04分、最高68時間14分)からも明らかのように、学習者にとってeラーニングによる学習は、授業を半期1コマ分余分に履修した程度の負担である⁹。指導する側はこれだけの負担を学習者に強いている以上、それなりに授業外で作業することを受け入れなくてはならないだろう(数週間に1度、30-45分程度)。教員の負担は、学習者にとっての利益だけでなく、教員自身の利益にもつながる。学習者が週1コマのドイツ語履修で次回までの1週間、時には休日に当たって2週間まったくドイツ語に触れる機会がなく、内容の多くを忘れて再び授業にやって来たときは、教員も失望と苛立ちを覚えつつ授業をすることになる。しかし学習者がeラーニングによって復習し内容の定着を達成したならば、それは授業の成功を意味し、次の授業をより充実させることへの意欲につながる。ドイツ語(をはじめとする外国語)の履修が必修ではなく自由選択の場合、初級でも週1コマしか受講しない、あるいは時間割や開講数の関係でそれ以上履修出来ないというケースは頻繁に見られる。しかしわれわれが経験上知っているように、週に1コマ程度では学生に新しい言語を学習したと満足できるレベル¹⁰へ到達させるには時間が足りない。時間割というシステム上の制約があるなかで、学習者の理解不足を補う方法として、対面授業とeラーニングによる授業外学習の組み合わせは有効な選択肢の一つと言えよう。

3. eラーニングの学習効果について

3.1. 独検模試の結果分析

開発したeラーニング教材の効果を検証するために、2011年度春季のドイツ語技能検定(以下、独検と呼ぶ)試験4級の問題を利用した実力テスト(以下、独研模試と呼ぶ)を実施した。独検

の4級の問題を実力判定に使用した理由としては、週2コマの授業を受講している学生が1年次の秋に受験可能なレベルであり、意識的に課外学習を行って準備をすれば合格可能であること、文法項目の点では授業内でほぼ出題範囲をカバーできることが挙げられる。しかし、後にも触れるように独検では文法問題はほんの一部に過ぎず、語彙力を問う問題、まとまった量の対話文や読解問題が出題されるなど、出題内容は必ずしも本教材の定着度を測定するのに適切なものではなかったが、総合的な言語運用能力の養成という観点からの本教材の成果・問題点を明らかにすることには有効であろう。

さて、普通教室で対面授業を行いeラーニングは授業外の宿題とするクラスをNクラスとし、もうひとつのコンピュータ教室で授業を実施したクラスをCクラスとして、それぞれのクラスごとに独検模試の成績を表にしたものが表1と表2である。2つの表を比べてみると、普通教室でeラーニングを完全に宿題とした場合と、コンピュータ教室で授業中にもeラーニングを実施した場合とでは、いずれも成績上位者から下位者までほぼなだらかな分布を示し

表1 独検正答率（Nクラス）

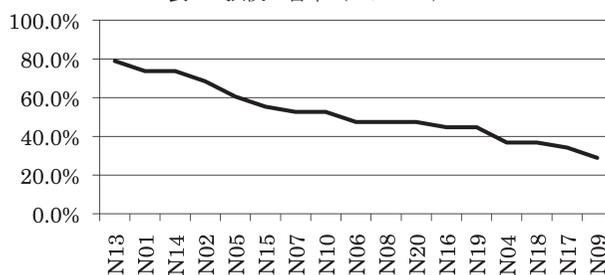
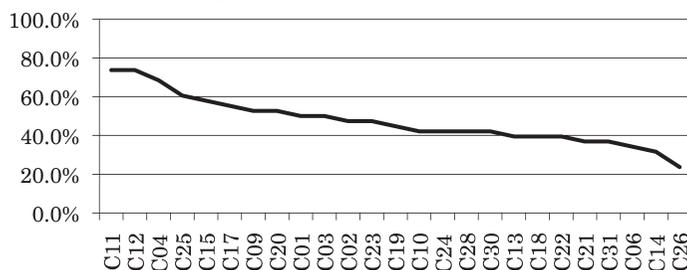


表2 独検正答率（Cクラス）



ており、傾斜の角度も相似していることから、授業教室にコンピュータがあったか否かは学習効果に大きな影響を与えなかったと思われる。

両クラスの成績傾向が相似していることから、両クラスの学習者を混合して、独研模試の成績順に並べてみたものが表3である。サンプルは42人である。ここに示された成績とeラーニングの学習にはなんらかの関連性があるのかを検証したい。そこでまず成績分布図に独研模試実施時のeラーニング学習時間を棒グラフで合わせて表示したものが表4である。大きな間隔をあけて突出した学習時間が現れているが、この表からは大きな傾向をつかむことはできない。そこで、学習時間ではなく、eラーニングの進捗状況(%)との相関を表したのが表5である。これを分析するため、正答率ごとにグループ分けを行った。まず合格である正答率60%に到達した上位の9人、50%台の9人、40%台の12人、30%台の10人、20%台の2人である。

次にこれらのグループごとに、進捗率最大値、最小値を棒グラフで、平均値を折れ線グラフで

表3 独検4級正答率(全体)

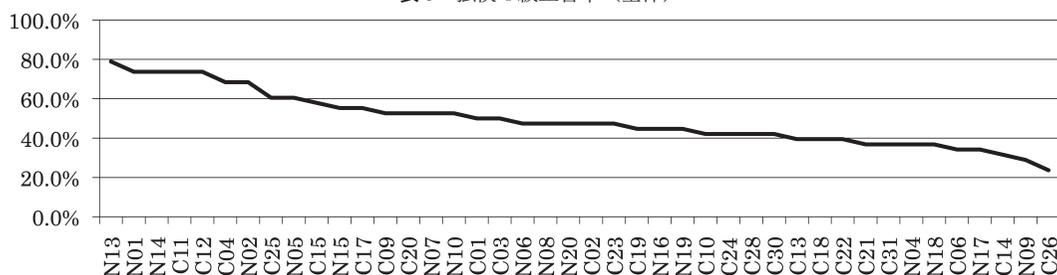


表4 独検正答率とeラーニング学習時間の相関(全体)

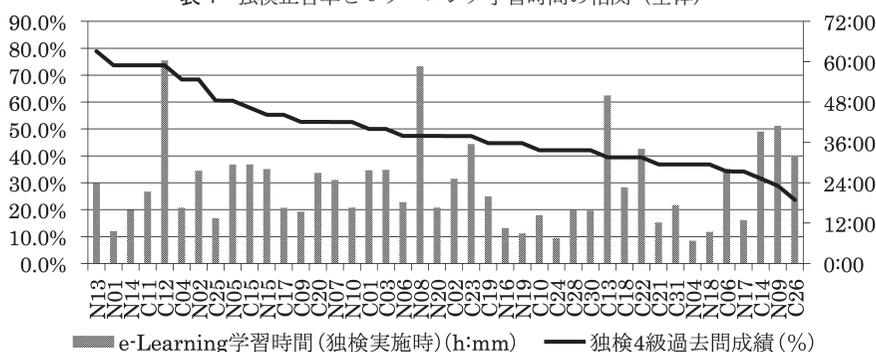
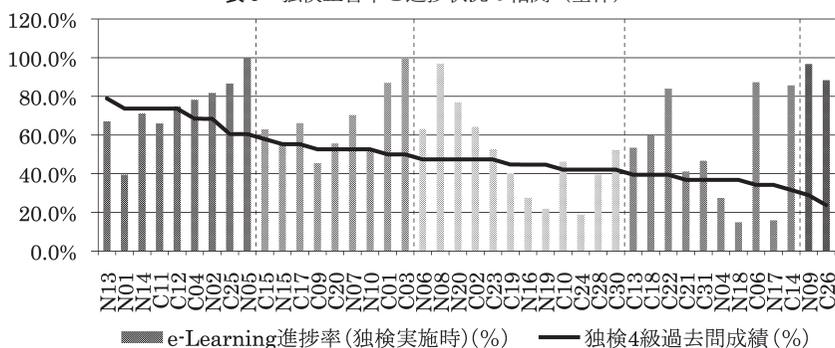
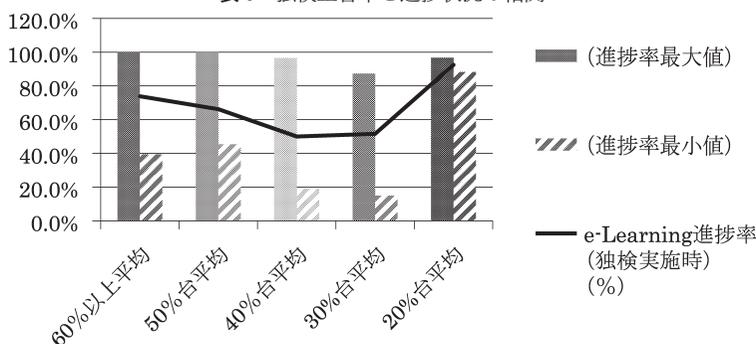


表5 独検正答率と進捗状況の相関(全体)



表示したものが表6である。正答率20%台の2人はともに突出した進捗率を示しているが、サンプルが少ないため分析が困難である。しかしこの2人は大変努力したにも関わらず、望むような成績をあげられなかった残念な例とみなすことができよう。各成績グループの進捗率の最大値は、どのグループでも大差なく高い値を示しているが、正答率60%以上から30%台にかけて、微妙な低下が認められる。そして進捗率最小値をみると、正答率20%台はサンプル数が少ないので除外するとして、一番高い値を示しているのは50%台である。このグループでは、平均的に高い努力

表6 独検正答率と進捗状況の相関



をしているけれども、それがまだ目に見える成果へと結びついていない状況だと言えるかもしれない。しかし独検4級の検定基準では、目安となる学習時間が90分授業で40回以上の受講とされているので、1年次の12月末にこの状態であるのは、必ずしも低い成績を意味しているわけではない。

平均値をみると、模試の成績がよいほどeラーニングによる学習が進展している傾向が認められる。しかしまだeラーニングが成績向上に効果あったと断定することはできない。成績上位者は、もともと学習能力が高いため、どのような教材を用いても高い成績を取めることができるという可能性があるからである。ただし成績上位者グループに関しては表5でも確認できるように、成績が下がるほど進捗率がアップしている。このぎりぎり合格点に達するレベルでは、eラーニングの学習効果がある程度成績に反映しているとみなすことができよう。いずれにせよ、初年次の12月に独検4級の筆記試験で合格レベルに到達できる学習者が42人中9人、つまり21.4%、おおよそ5人に1人いるので、今回の試みはある程度の成果をあげていると言える。

成績50%台でも、成績が下がるほど進捗率がアップするという成績上位層と同様の傾向が認められる。そして成績40%台になると、今度は逆に成績が高いほうが進捗率もアップしている。この成績50%前後で進捗状況(%)がピラミッドを描いている層は、努力して学習しつつ、まだ期待する学習効果をえていない集団とみなすことができる。このような学習者のレベルアップを可能にする教材へといかに改良するかが今後の大きな課題である。

成績40%台でeラーニングの進捗率を押し下げているのは、40%台下位の半分である。この際立って低い進捗率は、学習意欲の低さによるものなのか、学習習慣の不足によるものなのかはここから判断することはできない。おそらく両方のタイプが混在していると推測される。進捗状況(%)の平均が成績40%台とほぼ同じ30%台は、その中間層の進捗状況の悪さが目を引く。この層は学習時間も短いので、そもそもeラーニングをやっていないといえよう。この層より正答率が下がる30%台下から20%にかけてのグループには、逆に進捗状況ではトップレベルという一群が観察される。すでに一部言及したように、彼らは真剣にこの教材に取り組んだということがで

きる。そのような真面目な取り組みを結果に結びつけるためにも、教材をいかに改良するのかと
いうことが大きな課題だと言える。

3.2. 独検模試の得点傾向の分析から見える教材改良への課題

これまで独検模試の総合点に注目してきたが、個別の大問の得点状況についても分析を加えて
みたいと思う。N・C両クラスの平均得点率の右に、実際の独検受験者1427名の成績を並べたの
が表7である。どの大問でもN・C両クラスの得点率が大きく下回っているという事実は否めな
い。しかし独検はこのとき、受験者の79.1%にあたる1129名が合格しており、実際の受験者は合
格を目指してあらかじめ十分な学習をしているのに対し、N・C両クラスではほぼ抜き打ちで、
しかも初年度の12月であったことを考慮する必要がある。

さて、N・C両クラスの成績に的を絞って考察してみよう。高い正答率に達しているのは、「1.
発音・アクセント」「2. 動詞の現在人称変化」である。これらは期待通りだったのだが、想定外
だったのが、「9. 読解 (内容と合致する選択肢を選ぶ)」と「7. 読解 (長文を読み、それを表
す絵を選ぶ)」も多く学習者が高得点を示したことである。今回開発したeラーニング教材は同
一のソースから作った授業用教材も含めて文法中心だったので、短く文脈のない文章をいくつも
並べたものだったことを考えると、読解力が十分に養成されていないのではないかと懸念してい
たのである¹⁾。

反対に、本来eラーニングで集中して学んだはずであったのに、思うような成果を上げていな
いのは「3. 格変化 (名詞・代名詞・冠詞)」である。これは正確な文法理解が求められる問題だ
が、今回提供したeラーニングが、そこまでの理解を助ける手段とはまだなっていないことを表
している。これを改良すべき第一のポイントに挙げることができる。

さらに「4. 語順」「5. 語彙」「6. 会話の状況」「8. 対話文」でも正答率は低い傾向にある。
「4. 語順」については、副詞などの語彙や定形第2位、枠構造などドイツ語文法の基礎知識に関
する総合力が問われているので、これは他の分野を強化することによってeラーニングの学習者

表7

独検模試・大問の種類	学習者 正答率 (%)	独検受験者 正答率 (%)
1. 発音・アクセント	72.6	86.5
2. 動詞・助動詞の現在人称変化	71.4	90.2
3. 格変化 (名詞・代名詞・冠詞)	20.8	48.6
4. 語順	29.8	59.2
5. 語彙	47.6	63.8
6. 会話の状況	36.9	68.3
7. 読解 (長文を読み、それを表す絵を選ぶ)	61.9	90.2
8. 対話文 (空欄に適切な文を選ぶ)	29.0	64.3
9. 読解 (内容と合致する選択肢を選ぶ)	73.2	90.6

にとっても結果的に正答率が上がるものだと思う。しかし、ドイツ語の語順の特性について、もう少し注意を向けさせる問いかけも必要だったのではないかと感じさせられる。

語彙問題の結果には、教材で使用した語彙の偏りが影響していると思われる。より一般的で多様な語彙形成のための改良が必要だ。Lehrer(男性教師), Schüler(男子生徒), Vater(父), Mutter(母)といった限定された基本語彙ばかりが何度も登場する必要はない。短い文の練習の中であれ、今後のコミュニケーション能力の向上に寄与する単語選択は心がけなくてはならない。

また、会話・対話文の形式で正答率が上がらなかったが、これらは文脈を正しく理解して答える必要がある問題である。長文の高正答率によって多くの学習者はドイツ語が「何となくわかる」状態であることは推察できるが、それを「きちんとわかる」「正しく理解する」状態へとレベルアップさせるためには、やはり格変化の問題に関して指摘したように、正確な文法理解へと導く問題構成とボリュームのバランスが必要である。

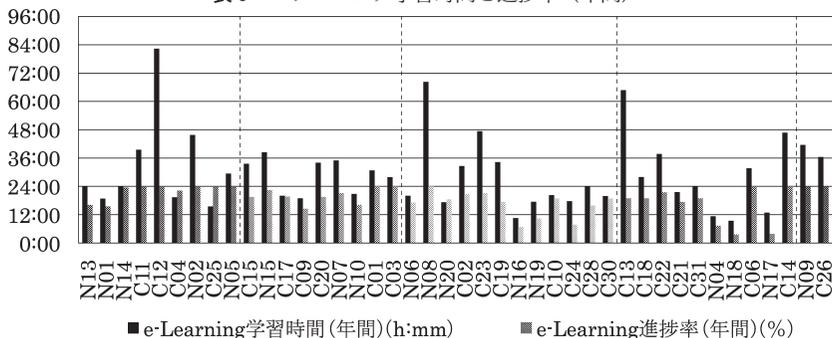
3.3. 学習者の評価

最後に学習者に実施したアンケートについても触れておきたい。学習する立場からの意見にももちろん改良のヒントが隠れているからだ。学習者たちは、今回のeラーニングの量を多いと感じている。それは最終的な学習時間（表8）をみても明らかである。これをどの程度に設定したいのかということを確認して量と構成を考える必要がある。指導する側が、クラスによって、その独自の判断で、基礎的な問題のみに留めるのか、標準問題も行うべきか、あるいは発展問題まで解くのか、など細かく設計できるのが理想である。

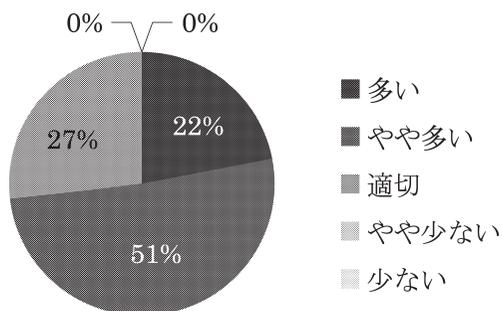
難易度については、「やや難しい」から「適切」が大半を占めている。問題を精査することで、たとえば基礎問題は「易しい」に、標準問題は「適切」、発展問題はより高次の知識と内容を問うて「やや難しい」レベルに設定できればよいかもしれない。

さらに今回のeラーニングでドイツ語が身についた実感があるのか尋ねたのが③である。78%と大半の学習者がいくらかでも身についたと回答しているが、記名式のアンケートだったためこの数字は参考に留めておく。

表8 eラーニング学習時間と進捗率（年間）

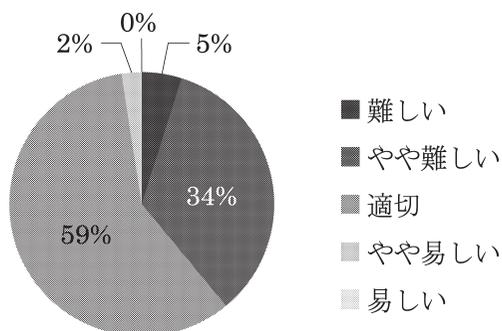


学習者アンケート①
e-Learningの量について



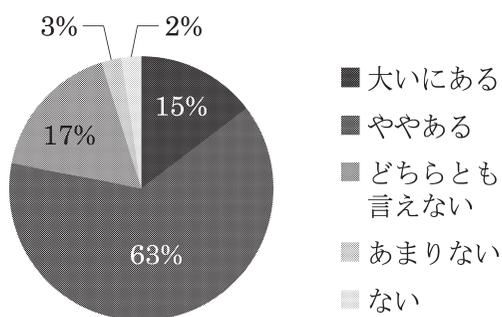
多い	9
やや多い	21
適切	11
やや少ない	0
少ない	0
合計	41

学習者アンケート②
e-Learningの難易度について



難しい	2
やや難しい	14
適切	24
やや易しい	1
易しい	0
合計	41

学習者アンケート③
e-Learningによって身についた実感はあるか



大いにある	6
ややある	26
どちらとも言えない	7
あまりない	1
ない	1
合計	41

実施日：Nクラス 2012年1月16日，Cクラス 2011年12月20・22日
実施方式：記名式

おわりに

「学生が勉強をしない。」これは教員が集まればついつい口をつく嘆きであるが、学生の学習時間の不足はもはや教員の嘆きに留まらず、大学が取り組むべき重要な課題になっている。さらに英語以外の外国語については、科目を廃止する大学も増え、学生がしっかりとその語学を身につけるのに十分な授業時間を提供できない大学も少なくはない。そうした中、本学は選択科目とはいえ 1 - 3 年生までは最大週 2 - 3 コマ、4 年生でも 1 コマの授業を提供できている点では恵まれた環境にあるといえよう。だが、それでもある程度語学が身についたと実感できるレベルにまで到達するには学習時間が不足しているというのが科目担当者の実感ではないだろうか。授業が足りないのならば自宅学習を増やせないか。それを担うもののひとつが e ラーニングである。もとより強制ではなく、学生が自主的に課外学習に取り組むことが望ましいのであるが、学習の仕方を提示して、自宅学習へと促すことも多くの学生には必要なのではないか。そして、自分にも分かった、出来たという学習における成功体験を少しでも味わえる教材を提供できないか、そんな思いで教材を開発してきた。

結果を見ると学習時間の確保という点では一定の成果が得られたが、学習の効果、喜びという点では、まだまだ不十分であることが明らかになった。今後、今回の分析を踏まえ、学習者にとって少しでも満足のいく教材に改良していきたいと思う。

註

本稿は 2012 年 7 月 14 日に北星学園大学で行われた北海道ドイツ文学会第 74 回研究発表会での発表原稿を基に加筆修正したものである。教材開発に協力してくれた履修者諸君に改めて感謝したい。また、本研究は平成 23・24 年度北海学園学術研究総合研究の成果の一部を含むものである。

- 1 昨年度使用のプリント教材をベースにして、文法項目の見直し、読解テキストの整備など大幅な拡充をしたうえで、本年 4 月に教科書試行本を発行した。北海学園大学ドイツ語スタッフ編『e ラーニングで学ぶドイツ語の基礎』2012 年。
- 2 <http://hotpot.uvic.ca/>
- 3 岩崎克己『日本のドイツ語教育と CALL. その多様性と可能性』三修社 2010 年、79 頁参照。
- 4 ドリル型の教材は CALL 草創期から開発されてきたものであり、コンピュータの発展とともにサーバ型からスタンドアローンの PC、そしてインターネットを利用したものへと発展し、出題形式も多様化している。とはいえ、コンピュータでドリルをするという発想自体は旧タイプとも言える。1990 年代半ば以降インターネットの普及によりメールやチャット、フォーラムなどの情報コミュニケーションツールを利用した取り組みも多様化しており、授業の組み立てにはそうした多様な可能性についても視野に入れておくべきであろう。なお、CALL の歴史については岩崎、前掲書を参照のこと。
- 5 ニュートン社の e ラーニング・システムについては、札幌大学の田原博幸・尾田智彦両氏による私立大学情報協会平成 21 年度教育改革 IT 戦略大会での口頭発表「自動繰り返し学習機能付 e ラーニン

グシステムを活用した英語授業」により、オリジナル教材へと応用可能であることを知った。

- 6 <http://www.schellingstrasse60.de/> なお、教材の舞台となっているシェリング通 60 番地の住居はミュンヘンに実在するもので、住民に語らせることでオーセンティックな教材を提供する試みとなっている。
- 7 『トレーニングペーパードイツ語／教養課程 文法中心学習 1』布施敬二郎，田中俊夫協力，ニュートンプレス 新訂第1刷 1981年，新装版 2003年，『トレーニングペーパードイツ語／教養課程 文法中心学習 2』布施敬二郎，田中俊夫協力，ニュートンプレス 新訂第1刷 1981年，新装版 2003年。
- 8 例えば，„Ich bin gegen den Sozialismus.“（私は社会主義に反対です。）などといった，現在の学生のニーズに必ずしもそぐわない問題文が含まれている。洒落で残してしまったが。
- 9 もちろん大学の単位は授業時間外での学習を前提としており，単位時間の実質化を図ろうとすると1単位科目で1学期 22.5時間（90分の授業を2時間とみなしたとしても，15時間）の授業外学習が必要である。今回のeラーニングの学習時間でも不足しているが，eラーニング以外の課題の可能性も考慮すれば，eラーニングだけで通年で20時間程度の授業外学習を実現している点は単位時間の実質化という点からも評価できよう。
- 10 基礎的な単語を修得し，簡単なテキストが活字・音声の両方で理解できる程度。
- 11 本文中でも言及したように，授業では共通教材以外の素材を扱っているし，会話 I・II や文化 I の授業を受講している学生も含まれていることを考慮に入れなければならないのだが，これらの影響を厳密に評価することは困難であり，今回は分析を断念した。